はじめに

本講義は旧帝大をはじめとした難関国公立大学合格を目標とする講座です。

難関国公立大の現代文といえば

「記述のポイントがわからない」

「そもそも勉強して点数が上がるのか」

というものです。しかし、論理的構造分析を身につけ、論理のルールに従って真偽判定をしていけば、全ての問題に根拠をもって解答することができるのです。

「難関国公立大の現代文は難しい」

という常識を覆すのがこの講義です。

本講義を終えたとき

「周りがほとんどまともな対策をしない現代文こそ、差をつけることができる科目だ」

と思えるように講義をしていきます。

この秋、みなさんの頭脳に革命を起こしてみせます。

本講義の現代文の考え方

本講義は文章を従来の「意味論」だけでなく「統語論」の側面からも解説していきます。もちろん文章には「意味」があります。しかし、「意味」というのは読者の側に生成される主観的なものでもあります。ですから、「意味」ばかりを追求していくと、「読者によって意味が異なる」ということが起こり得るのです。

一方、大学入試の問題はたとえ最高峰の記述問題であろうとも、「読者によって解答が異なる」ということはありません。そこには客観的に正しい答えがあって、その答えや答えに至るプロセスがいかなるものかによって点数がつけられます。であれば、言語の客観性である「統語論」的側面を無視することはできません。言語の「統語論」的側面とは以下の三つです。

① **文法**
② **構文**
③ **論理**

たとえば、①文法ですが、筆者によって副助詞の「も」の使い方が異なるということはあり得ません。また、読者によって副助詞の「も」の機能が異なって受け取られるということもあり得ません。副助詞の「も」は、たとえどんな筆者であろうと、どんな読者であろうと、客観的に機能します。

また、②構文ですが、本講義では「主語―述語」の関係や、「修飾語―被修飾語」の関係や、「接続語―被接続語」の関係か

らなる文構造のことを構文と呼びます。この構文に関しても、文法と同様のことが言えます。読者によって「文の主語―述語が異なる」ということはありません。構文もまた、どんな筆者であろうと、どんな読者であろうと、客観的に機能します。

最後に、③論理ですが、ここが本講義の最大の特徴です。①文法や②構文は「日本語」という言葉のルールです。それに対し、③論理は「日本語」だけにとどまりません。あらゆる言語に及ぶ最も普遍的なルールといってよいでしょう。数式が世界共通の言葉であるように、論理もまた世界共通の普遍的ルールなのです。本講義では論理を以下の「４つの言葉のルール」と「４つの言葉の使い方」とします。

・「でない」という否定
・「かつ」という連言
・「または」という選言
・「ならば」という条件法

以上の４つの言葉のルールを駆使して筆者は文を書きます。ですから、読者も４つの言葉のルールを理解して読まなければなりません。本講義ではその「ルール」と「方法」を伝えます。

さあ、最先端の現代文講義の開講です。

柳生　好之

受講の際の注意点　効果的な講義の利用法

最高の講義を用意しましたが、ただ講義を受けるだけでは力はつきません。効果的に学習するためにも、この利用法を実践してください。

Ⅰ　予習について

まず一度本文を通読し、「要旨把握」と「意味段落分け」をしてください。そして次に、「設問」や「傍線部」を確認してから、「解答の根拠」を本文中に求めてください。最後に、本文中の解答の根拠をもとにして設問に解答してください。

秋期講習では「制限時間あり」で60％を目標として解答してください。その際、「解答の根拠とした文」に線を引いておいてください。

この作業を予習の段階でしておくことで、講義に集中できる仕組みになっています。

予習ポイント　問題を解く。解答の根拠をメモしておく。

Ⅱ　講義について

映像授業を受講している間は、メモを取らないでください。

ただ見たことをノートに写す、あるいは聞いたことをその場でメモに書くというのは、「頭の中には何も残っていない」状態になりやすいのです。ですから、「復習タイム」に講義のポイントを思い出しながらメモを取ってください。あくまでも「一度頭の中に置いた」上で、「頭の中から取り出す」という作業を怠らないでください。この作業が「文章を読み、解答を書く」という現代文の解答プロセスのトレーニングになるのです。**ただし、本文に線を引くのは構いません。**

講義ポイント	講義中はメモを取らない。説明や図は講義後ノートに書く。

Ⅲ　復習について

よく「現代文は復習しなくてもよい」という意見を聞きます。しかし、そもそも「復習しなくてよい」なら、復習して覚えるべきポイントがない「授業」も受ける必要がないでしょう。受験生の貴重な時間をいただくわけですから、本講義は「復習ポイント」も用意してあります。

「復習ポイント」をしっかり覚えてください。これは現代文を分析する上で必要になる考え方です。

復習ポイント	復習ポイントを覚える。問題を解き直す。

難関国公立大 現代文　目次

第一講 …… p.8
第二講 …… p.18
第三講 …… p.28
第四講 …… p.40

第一講　35分

次の文章は檜垣立哉『食べることの哲学』の一節である（設問の都合で一部省略し、表記を改めたところがある）。読んで設問に答えよ。

誰もが普段気づいていないことであるが、食べものというのは、ほとんどが「生きたもの」である。このいい方はいささかオブラートにくるんだものであり、実際には塩分やミネラルなどをのぞき、われわれは何かを殺して食べているのである。もちろん、ヴェジタリアンがおり、動物は食べるべきではないという主張がなされることもある。だが、その場合でも食べてもよいとされる植物もまた生物であることには変わりがない。また多くの食のタブーはこの「殺す」ということにこだわりをもっている。何をどういおうと、われわれは生き物を食べ、そのかぎりでそれを殺している。

とはいえ、よくおわかりのように、とりわけ近代社会においてはみだりに生き物を殺すことを（1）スイショウする文化はほぼ存在しない（戦争という重大な例外事例はあるが、この点は措（お）いておく）。一方では生きているものを殺してはダメだというのは文化の基本的な原則でもある。だが同時にわ

れわれは日々自分が生きるなかで、大量の動物や、あるいは植物を、やはり殺して食べているのである。現代文明においてはまさに、みえないところでそうした殺戮（さつりく）はおこなわれる。これは[2]タンテキに矛盾ではないか。

すがすがしいまでに[A]この矛盾を問い詰めるのは宮沢賢治である。宮沢は法華経というきわめて戦闘的な仏教的信仰を背景にもちながら、この問題を小説や童話という仕方で書きつづけた。それは食物連鎖そのものを問う「よだかの星」、あるいは人間もまた食べられる自然であるということを喚起させてくれる「注文の多い料理店」や「なめとこ山の熊」などにおいて明示されていることである。人間は生き物を食べないと自分が死ぬ。しかし、自己の倫理に忠実であれば、そもそも自分が死ねばよいのではないか。宮沢の問いそのものはここにまで達してしまう。これは極限的な「食べない」に通じるものである。

そしてまたこの場合、「ここまでなら食べてよし」「これは食べてはいけない」という問いにむすびつくことも[3]オウオウにしてある。これもまた[B]文化相対主義が幅をきかせる議論のようにみえる。曰く、日本人は魚を生で食べるが、近年の「スシ」ブーム以前はそのようなことは世界のどこでもだいたい気持ち悪がられた。（注1）ムスリムは（注2）ハラルフードという特定の規則にのっとった殺し方をした食材しか食べない。インドでは牛は

聖なる生き物なので食べない、等々。だがこうした議論のそれぞれは、実際にはさして重要ではない。この議論には、あるゼロ点ともいうべき根底がある。それは「人間は人間を食べない」ということである。これはカニバリズムのタブーといわれる。カニバリズムの[4]<u>キヒ</u>は、本当に人類に共通なのかという議論があるが、これが「食の下限」を規定していることは事実であろう。そしてそれがゆえに、むしろ人間が人間を食べるということは、さまざまな人類学のなかの（西洋中心的な）「野蛮人」の表象のなかにみうけられることになる。この点については、社会学者である雑賀恵子が、『エコ・ロゴス』（人文書院）という書物で大変[5]<u>ケイハツ</u>的な知見を提示してくれている。食べてよいものと食べてはいけないもの、これは通常は文化的なことと考えられるが、人間を食べることについてはきわめていりくんだ、薄暗い場面という状況にたちいたらなければならない。

　このことは食育にも連関する。大阪の豊能町でおこなわれた、殺して食べることを前提に豚を飼うという、実験的ないのちの授業の顛末（てんまつ）をまとめた『豚のPちゃんと32人の小学生』（ミネルヴァ書房）という本がある。この内容は、妻夫木聡主演で、『ブタがいた教室』という映画にもなっている。この試みは、教育学的にはさまざまな批判をうけるものだろうが、哲学的にみれば、文化と動物との人間としての臨界を、教育という視点か

らあつかうことにより（つまり文化のなかに押しこめようとして）、それが無理であることを露呈させてしまう貴重な実験であるようにみえる。

　率直にいえば、これは教育としてはとても褒(ほ)められたものではない。小学生たちは真剣にはなしあうものの、結末はいたって無責任であるからだ。だがそこでは、「無責任」であるからこの試みが悪いということにはおそらくはならない。食育や、食べるということをいかに道徳的にあつかったところで、そこには「生き物は生き物を食べる」という絶対的な仕組みが介入し、それについて教育は、ほぼ何もいえないということが明らかにされるのである。そこでの「無責任さ」はいわばどうしようもない「無責任さ」である。さて、ではどうすればよいのか。これこそが食にかんする哲学の大テーマではないのか。

　食にかかわる矛盾にまつわる問題系は、もちろん文化間での「食べてよいもの」「よくないもの」の対立にも展開できる。私は毎年和歌山県の紀伊勝浦に学生と合宿にいくことを習慣としているが、その途中に太地町という本当に小さな町がある。この何ということのない田舎の町は、[注3]シーシェパードや、それと関連する反捕鯨運動の強烈な攻撃対象になったことで一躍脚光を浴びた。『ザ・コーヴ』という、この土地での伝統的なイルカ漁を批判する映画はきわめて政治色の強いものであるが、その映像的価

値は、興味深いことに攻撃されている太地町のひとのあいだでも認められている部分がある。

　こうした運動をどう考えるのか。人間同士の利害がおそらくいちばん対立する位相は、Cこういう場面であるだろう。人間と食をめぐる事態は、確かにさまざまな禁止とそのせめぎあいのなかにある。ただしそれは単純な文化間差異の問題なのではない。むしろより複雑な人間と自然とのあいだに横たわる何かに触れるものではないか。

　ここまでのはなしだとだいぶ陰鬱な印象をうけるかもしれない。確かにそうなのだが、一面こうしたタブーや暗さのうえに人間の味覚がある。それは残酷さをひきうけたかぎりでの、ある種の味覚の洗練なのかもしれない。この点については、原点にたちかえって(注4)レヴィ＝ストロースの(注5)料理の三角形から「人間にとって何が旨(うま)いのか」という問いをたててみたい。

　レヴィ＝ストロースは、もともとは神話をあつかう人類学者であるが、料理に触れるときには神話と料理の相同性についてとりあげている。神話は、理解しがたい自然の事象に対し、それと人間の世界とを調停する手段であるとレヴィ＝ストロースはいう。現代において神話はたいてい6コウトウ無稽なものにみえるが、そこには明確な論理があり、自然の事象を文

化の事象で説明するためのひとつの調停であるとされるのである。そしてそれは、料理についても同じだという。

食べるものは、自然物である。料理とはこの自然物に何らかの人工的な加工をほどこすことにほかならない。この加工の様式は、「生のもの」「火にかけたもの」「腐敗させたもの」によって形成される「料理の三角形」として提示されるが、ここでは「腐敗させたもの」という特殊な領域をとりわけ強調したい。そこで「煮たもの」は「腐敗」という現象と強く連関する。腐敗させることとは、一見すると食を食でなくさせる行為であるかのようにみえるがそれは違う。腐敗は発酵とむすびつき、実に絶妙な人間の味覚そのものを可能にするのである。

発酵がなければ、味わい深い料理は存在しない。そして発酵というのは人間が手を加えるというよりも、ある期間それを自然のなかに放置することによって旨みをひき出すという[D]自然と文化の接合点を示す現象である。納豆や味噌（みそ）や醤油（しょうゆ）、干物や保存食、そしてもちろんアルコール、これは人間の食の原点である。これを哲学的な主題として押さえることは、きわめて重要な意味をもつに違いない。人間は毒を食べるのである。あるいは嗜好（しこう）品の歴史を考えればこのテーゼはもっと[7]ロコツに示せるのかもしれない。さらにいえば現代における猛毒というのは、純粋精製した砂糖

を入手した近代人にとってのスイーツそのものであるのかもしれない。

注

1　ムスリム――神に帰依するものの意で、イスラム教徒を指す。
2　ハラルフード――イスラム教の律法に従って処理された食材・食品。
3　シーシェパード――激しい抗議活動で知られる国際的環境保護団体。
4　レヴィ＝ストロース（一九〇八～二〇〇九）――フランスの人類学者。構造主義人類学の創始者。
5　料理の三角形――レヴィ＝ストロースが『食卓作法の起源』で示した、「生のもの」と「火にかけたもの」と「腐ったもの」を頂点とする三角形の概念図。

問一　傍線部1～7のカタカナを漢字に改めよ。

問二　傍線部Ａ「この矛盾」とはどのような矛盾か。五〇字以内で説明せよ。

問三　傍線部Ｂ「文化相対主義が幅をきかせる」とあるが、どのようなことか。六〇字以内で説明せよ。

問四　傍線部Ｃ「こういう場面」とはどのような場面か。六〇字以内で説明せよ。

問五　傍線部Ｄ「自然と文化の接合点を示す現象」を料理に見いだすのはなぜか。本文全体の論旨を踏まえ、一〇〇字以内で説明せよ。

問一

1	5
2	6
3	7
4	

問二

問三

問四

問五

第二講

35分

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

過ぎ去った日々や亡くなった人々のことが時折思いもかけず心によみがえる。そのときそうした思い出や面影は何か過去の形見が残されたもののように思われる。それらの日々や人々はもはや二度と戻らないが何かその影のようなものがわれわれの手元に残されている、といったように。ただその影によってわれわれはかろうじて過ぎ去り失われた時とつながっているのだ、と。

つまり今われわれに残されているのは、過去そのものではなくその過去の写しなのだと感じるのである。過去はひとたび去れば再び還らない、ただそのいささかの記憶が残留しているだけなのである、と。この、記憶とは過去の出来事や人々の「写し」である、という思いはわれわれの心に深く根づいている。われわれの言葉遣いにもそれは明らかであろう。「記憶に焼き付いている」、「眼に焼き付いている」、「いまだにあざやかな記憶」、「記憶に新しい」、「記憶がうすらぐ」、「(1)アワい記憶」、「旧い記憶」等々、

これらの言い廻(まわ)しにはまぎれもなく「写真」の比喩が下敷きになっている。その時々の印象や体験が人間カメラで写されて頭の中にしまいこまれる、そのアルバムからあの写真この写真がふいと浮かび上がる、新しい写真は(2)ガイして鮮明だが昔のものになるにつれ色はあせ形はぼけてくる。しばしば、あったはずの写真がいくら探しても見つからない、それなのに時には思いもかけなかった写真が浮かび出てわれわれをなつかしがらせる。こういった「写真」の比喩がある。心理学者もまたこの比喩の下に、記憶心像だとか記憶痕跡などを語るのである。

　脳生理学者がこの痕跡を大脳その他の何らかの機構や物質だと考えたくなるのも無理からぬところであろう。だいぶ昔、といっても戦後であったが、面白い実験が話題になったことがある。プラナリア（渦虫）という小さな下等水中動物に条件付け訓練によって電気ショックの方を避け、餌のある方に行かせるようにする。そう訓練したプラナリアを、今度は未訓練の別のプラナリアに食べさせたところ食べた未教育のプラナリアもちゃんと電気を避けて餌に向かった、というのである。この実験はその後確認されなかったようであるが、もしそういうことがあるならば人の爪の垢(あか)を煎じて飲んで利口になるといったことも不可能ではあるまい。それはさておいても、失語症その他記憶障害の研究から脳が記憶の保持や再生に強い関連

をもっていることは今日疑う人はいないだろう。

しかし、脳が記憶に密接な関係をもっているということと、「写し」の比喩が正しいということとは別のことである。私にはA「写し」の比喩には基本的な誤解があるように思える。

ある風景の「写し」、例えば写真であるとか絵であるならばそれは元の風景と同様に眼で見ることのできるものである。それは見えるものとして、見える細部をもっていなければならない。例えばそれが写真であるならばそのどの小部分といえども定まった黒白の濃淡なり色調なりをもっている。つまり、その小部分に着目することができるし、その着目した小部分は特定の濃度なり色調なりをもっている。ところがわれわれが何かの風景を記憶の中に思い浮かべるとき、それがどんなに熟知した風景の場合でもそのように見つめることのできる細部をもっているだろうか。自分の部屋の机の右隅の一点とか、母親の顔の唇の端とかを記憶の中で見つめることができるだろうか。できまい。また、その記憶の中の机や母親の顔を忠実に写生しようとしてみてほしい。それもできないことがわかるだろう。絵の上手な人ならば、それらの記憶から、あるいはそれらの記憶に頼ってその机や母親の顔を画(えが)くことはできよう。しかしそこで画かれた机や顔は本物の机や本物の顔に似せた絵であって、記憶の中に浮かんだ机や顔の写生

ではないことは明らかであろう。

記憶に浮かんだ風景は眼に見える映像ではないのである。眼でここあそこと見つめることのできる映像ではないのである。残像だとか幻だとか、あるいはイエンシュの言う直観像はその種の映像であるが、記憶に思い浮かべられた風景はそうではない。それは記憶の中の音が今耳に聞こえる音ではないのと同様である。また、昨日の激しい歯の痛みは今なお生々しく思い出されるにせよ幸いなことに今は少しも痛くないのと同様である。痛みの記憶は痛くなく、悲しみの記憶は悲しくはない（その記憶でまた新たな悲しみが誘発されない限りは）。御馳走（ごちそう）の記憶で舌鼓をうつことはできないし、快楽の記憶が快楽であるわけではない。それと同様に、思い出された(3)センリツは今耳で聞こえるものではなく、思い出された風景は今眼に見えるものではないのである。

一つの風景を「思い出す」ということは、その風景の薄ぼけた映像を眼で見ることではない。もしそれが眼で見える映像であるのならば、私はそれをとにかく私の眼の前のどこかに見ているはずであるが、私が今眼の前に見ているのは机や紙であってそのどこにもそれとダブって昨日の会合の影のような姿が見えていはしない。B「思い出す」ということは見たり聞いたり味わったりというような「知覚する」こととは根本的に別ものなの

である。

　しかし、風景の思い出はたとえ眼で見ることのできる映像ではないにせよ、とにかくその風景そのものではなく、それがわれわれに与えた何ものか、形見であれ痕跡であれ何か今もなお残留している何ものかなのではないか。他のことはともかく、その風景自体は過ぎ去って今は亡きものだからである。このように考えるならばCそれもまた一つの誤解であると思う。

　かりにこの考えにしたがって、われわれが思い出すのは過去の風景そのものではなく、その痕跡様のものだとしてみよう。例えば今私の記憶にあらわれているのは東京駅そのものではなく東京駅の影、東京駅の痕跡だとしてみよう。ここで大切なのは、この場合私は何ものの影ともわからぬ姿を思い浮かべているのではなく、まさに東京駅の痕跡があらわれていることである。それがたとえ痕跡であろうともその痕跡は東京駅の痕跡として思い浮かべられているのである。だとすれば、「東京駅の痕跡」というときの「東京駅」は東京駅自体でなければならない。さもないと、東京駅の痕跡の痕跡の痕跡の……といったことになってしまうからである。だがそうならば私の思い出の中にはすでに痕跡ならざる東京駅自体があらわれているではないか。そうならば東京駅を思い出すのに今さら東京駅の痕跡などは不必要ではないか。

この事情を普通の写真の場合から説明してみよう。ここにAさんの写真がある。それが「Aさんの写真」であることを私が承知しているためには私は写真ではないAさん自身を知っておらねばならない。それと同時に、ある記憶痕跡が「何々の痕跡」だと承知しているのならばそれはすでにその「何々」を承知していることである。そしてその「何々」自体をすでに承知しているのであれば、それを承知するために今さらその「痕跡」を必要としないのである。だから私が東京駅を思い出しているとき、私は東京駅の痕跡を通じて東京駅を思い出しているのではない。私は東京駅それ自身をじかに思い出しているのである。

しかし、では死んで久しい亡友を思い出すときもその人をじかに思い出しているのか、と問われよう。私はその通りであると思う。生前の友人のそのありし日のままをじかに思い出しているのである。その友人は今は生きては存在しない。しかし生前の友人は今なおじかに私の思い出にあらわれるのである。その友人を今私の眼や肌でじかに「知覚する」ことはできないが、私は彼をじかに「思い出す」のである。そのとき、彼の影のような「写し」とか「痕跡」とかがあらわれるのではなく、生前の彼がそのまままじかにあらわれるのである。「彼の思い出」がかろうじて今残されているのではなく、「思い出」の中に今彼自身が居るのである。[D]ある意味では、

過去は過ぎ去りはしないのである。だから「痕跡」などを残す必要はさらさらないのである。

それならばわれわれの脳の中に刻まれた「痕跡様のもの」とは一体何なのだろうか。記憶は脳に「蓄えられる」ものではないのか。そうではないだろうと私には思われる。亡友を思い出すには私の脳の何かの機構が必要だろうし、その機構が(4)ハカイされれば私は恐らく彼を思い出すことはできないだろう。しかしそれは、何かを見るには眼球や網膜が必要なのと同じだと言えまいか。つまり、眼球は見るための器官であって今眼前に見えている机の姿が眼球の中にあるわけではない（網膜上の小さな倒立像は今私が眼前に見ているものではない）、それと同じ様に、脳の機構は何かを思い出すための不可欠の器官ではあるが、その思い出されたものがその機構の中に「蓄えられている」わけではない。だが、思い出すための器官である脳の機構が古びたり(5)ソンショウをうけたりすれば、当然「思い出し」にも障害がおきよう。老眼や乱視で物が見にくくなるのと同じである。そして、記憶がうすれ、記憶が失われることになる。

（大森荘蔵『大森荘蔵セレクション』平凡社、二〇一一年、二十一～二十七ページ「記憶について」一部改変の上、引用）

〔問一〕　傍線部⑴〜⑸の片仮名を漢字に書き改めなさい。

〔問二〕　傍線部Ａ「『写し』の比喩には基本的な誤解がある」について、なぜ誤解なのか、「『写し』の比喩」が何のどのような性質を指しているのかを明らかにしたうえで、八十字以上百二十字以内で述べなさい。

〔問三〕　傍線部Ｂ「『思い出す』ということは見たり聞いたり味わったりというような「知覚する」こととは根本的に別ものなのである」について、知覚することと思い出すことの相違を述べなさい。

〔問四〕　傍線部Ｃ「それもまた一つの誤解である」について、思い出を「痕跡」ととらえることがなぜ誤解であるのか述べなさい。

〔問五〕　傍線部Ｄ「ある意味では、過去は過ぎ去りはしない」について、「ある意味では」とあるが、どのような意味で過ぎ去らないのか述べなさい。

〔問一〕

1	4
2	5
3	

〔問二〕

〔問三〕

〔問四〕

〔問五〕

第三講　30分

次の文章は、唯一の肉親であった兄を亡くした「小父(おじ)さん」の日々を描いている。兄は鳥のさえずりのような言葉を操る存在であり、その言葉を正しく理解できたのは「小父さん」だけだった。兄の死後、「小父さん」は、兄とともに小鳥を見に通っていた幼稚園の鳥小屋の掃除を定期的に行っていた。文章を読んで問いに答えよ。

鳥小屋の掃除に幼稚園へ通う以外の時間、小父さんはしばしば図書館で過ごした。公民館の二階にある、(1)<u>こぢんまりした</u>分館だった。借りるのは例外なく鳥にまつわる本で、図鑑や写真集や科学書はもちろん、わずかでも鳥に関わりのあるものを探しては順番に読んでいった。案外、借りるべき本は尽きなかった。野鳥の写真を撮影する方法を解説した指南書もあれば、色変わりしたコキンチョウの交配に生涯をかけたある小学校教師の伝記もある。ヨウムに言葉を理解させる研究レポートもあれば、白鳥に乗って旅をする少年のおとぎ話もある。孔雀(くじゃく)公園の飼育員、独房で文鳥を友とした死刑囚、密猟者、鳩(はと)料理専門店のシェフ、鳥の鳴き真似を得意

とする口笛演奏家……。登場人物は多彩だった。

小父さんが立ち寄る時間帯、分館は空いていた。カウンターの向こう側に司書が一人、絵本コーナーの丸いテーブルに子供が二、三人、あとは書棚の陰に幾人かが見え隠れしているだけだった。天井は高く、蛍光灯の光は弱々しく、床は所々軋(きし)んで切ない音を立てた。南向きの窓には用水路に沿って延びる遊歩道の緑が映っていた。掲示板に張られた新着図書到着の案内も、本の背表紙の分類シールもどことなく黄ばんでいた。

いつしか小父さんは書棚の前に立ち、背表紙に目を走らせるだけで、求める本をパッと見つけることができるようになっていた。それを読みたいか読みたくないかは問題ではなく、大事なのはただ一点、鳥がいるかいないかだけだった。たとえそこに『鳥』の一文字がなかろうと、鳥とはどんなにかけ離れたタイトルであろうと、小父さんの目は誤魔化せなかった。本の奥深くに潜むさえずりがページの隙間から染み出してくるのを、小父さんの耳は漏らさず捕らえた。その一冊を抜き取り、ページをめくると、案の定そこには鳥の姿があった。分館に収蔵されて以来まだ誰の目にも触れていないページに、長く身を隠していた鳥たちは、(ア)「やれやれ」といった様子で、小父さんの手の中でようやく翼を広げるのだった。

「いつも、小鳥の本ばかり、お借りになるんですね」

ある日、新しく借りる本をカウンターに置いた時、突然司書から声を掛けられ、(イ)小父さんは狼狽（ろうばい）した。貸し出しカードを手にしたまま、しばらく声の主に視線を向けられなかった。

「ほら、今日の本もそう。『空に描く暗号』」

司書は本を受け取り、タイトルを読み上げた。

「渡り鳥についての本でしょう?」

その時初めて小父さんは司書の顔を見た。幾度となく分館に来ていながら、司書を意識したことなどなく、目の前の彼女とこれまでに何度くらい顔を合わせているのか、見当もつかなかった。しかし少なくとも彼女が、小父さんの読書の傾向を正しく把握しているのは間違いなかった。

「はい……」

仕方なく小父さんはうなずいた。自分が選ぶ本に気を配っている人間がいようとは思いもせず、不意打ちをかけられたようで(2)気後れがした。

「ごめんなさい。別に利用者の方の借り出し状況をいちいちチェックしているわけじゃないんです」

小父さんの動揺を見透かすように彼女は言った。

「ただ、ここまで一貫している方はそういらっしゃらないので、何と言うか、とても圧倒されているんです」

彼女は『空に描く暗号』の表紙を撫(な)で、それから上目遣いにはにかんだ笑みを浮かべた。

思いがけず若い娘だった。若すぎると言ってもいいほどだった。ふっくらとした頬にはまだあどけなさが残り、首はか細く、化粧気のない唇は潤んでつやつやしていた。短く切り揃(そろ)えられた髪は襟元で跳ね、無造作にめくり上げた事務服の袖口からは、白い手首がのぞいていた。

「ここに座っているとどうしても、誰がどんな本を借りるのかつい気に掛けてしまうんです。立派な老紳士が『不思議の国のアリス・お菓子大事典』をリクエストしたり、小学生の男の子がギリシャ哲学のシリーズを読破したり……。新着図書が到着すると、この本は誰の好みか、誰に相応(ふさわ)しいか、勝手に思い浮かべます。たまにその予想がぴったり命中すると、自分が善い行いをしたみたいな気分になるんです。そしてある時気がつきました。この人は鳥に関わりのある本しか借りない、って」

まるでそれが素晴らしい発見であるかのような口調で、彼女は言った。小父さんはただあいまいに、「ええ、まあ……」と応じるしかなかった。

「一体どこまで(ウ)<u>鳥の法則</u>は続くのだろうかと、ずっとどきどきしていました」

そう話しながら司書は、小父さんの手から貸し出しカードを受け取り、ノー

トに書名と分類記号と利用者番号を記入した。几帳面で綺麗な字だった。

「一見、鳥と無関係な本だと、ちょっと心配になるんです。だから返却された時、そっとページをめくって、鳥を探します。見つけられた時は、なぜかほっとするんです」

外見の幼さとは裏腹に、彼女の声にはあたりの静けさを乱さない落ち着きがあった。絵本コーナーの子供たちはいつの間にかいなくなり、他の人たちは皆書棚の間に隠れて姿が見えなかった。彼女がなかなか『空に描く暗号』を手渡してくれないせいで、小父さんはカウンターの前に立っているよりほか、どうしようもなかった。

「でも、今日は心配ありませんね。渡り鳥の本だって、はっきりしていますから」

ようやく彼女は本の上にカードを載せ、小父さんに差し出した。どう反応していいか分からないまま、彼は黙ってそれを受け取った。

「ね、小鳥の小父さん」

と、司書は言った。あなたは小鳥の小父さんなのだから、そう呼んだまでです、とでもいうような素直な微笑が口元からこぼれていた。思わず小父さんは「えっ」と短い声を上げた。

「幼稚園の子供たちは皆、そう呼んでいますものね」

小さくうなずいたあと、小父さんはズボンのポケットにカードを突っ込み、本を脇に挟んだ。

「返却は二週間後です」

そう言う司書の声を背中に聞きつつ、小父さんは分館を後にした。

帰り道、日曜日で閉まっている青空薬局の、入口に引かれた白いカーテンの隙間から何気なく中を覗(のぞ)き、ポーポーが姿を消しているのに気づいた。小父さんは自転車を止め、もう一度よく確かめた。やはり、ポーポーの入っていた広口ガラス瓶はどこにもなかった。それがあったはずのレジ脇には、口臭予防のガムが置かれていた。

ポーポーがないだけで、そこは自分の知っている青空薬局とは違う場所のように(3)よそよそしかった。先代の店主は死に、天井のモビールと小鳥ブローチはもはや跡形もなく、結局ブローチにしてもらえなかったポーポーたちも、飛び立てないまま待ちくたびれて打ち捨てられてしまった。

これで、お兄さんがポーポーのために特別に選ばれた人間であったことが証明されたのだ、と小父さんは自分に言い聞かせた。お兄さんが死んだからこそ、広口ガラス瓶は撤去された。あの中から一本を選ぶ権利がある、唯一の人間がお兄さんだった。ささやかな薬局の片隅で羽を休めていた小

鳥たちを、お兄さんは救い出したのだ。お兄さんにしかできないやり方で。

小父さんは再び自転車にまたがり、家路を急いだ。納棺の際、レモンイエローのポーポーをバスケットに納め、金具を閉じた時のパチンという音がよみがえってきた。言語学者の研究室へ向う汽車の中、終わりなく何度もその金具を開け閉めしていたお兄さんの震える指と、それを黙って見つめていた母親の横顔を思い出した。金具の音は、棺の蓋を閉める音よりもずっと正しく、お兄さんの死を証明していた。

自転車の籠の中で、借りてきたばかりの本がカタカタ鳴っていた。

「返却は二週間後です」

司書の言葉を、小父さんは声に出して言った。

「返却は二週間後です」

ペダルを踏む足に力を込め、もう一度繰り返した。本の立てる音と風の音に自分の声が紛れ、代わりに司書の声が耳元でよみがえってくるのを小父さんは感じた。(エ)彼女の声をもっとよく聞きたくて、更に力一杯ペダルを踏んだ。

（小川洋子『ことり』による）

（注）

○ポーポー——青空薬局で売っていた、包装紙に小鳥の絵が印刷された棒付きキャンディー。「小父さん」の兄は毎週このキャンディーを買い、包装紙がたまると貼り合わせて小鳥の形のブローチを作った。

問㈠　傍線の箇所（1）（2）（3）の意味を文脈に即して簡潔に記せ。

問㈡　傍線の箇所（ア）「『やれやれ』といった様子」には、「鳥たち」のどのような「様子」が表れているか。本文の内容に即して四十字以内で説明せよ。

問㈢　傍線の箇所（イ）に「小父さんは狼狽（ろうばい）した」とあるが、「小父さん」はなぜ「狼狽」したのか。その理由を本文の内容に即して四十五字以内で説明せよ。

問㈣　傍線の箇所（ウ）「鳥の法則」は何を指しているか。本文の内容をふまえて三十字以内で説明せよ。

問㈤　傍線の箇所（エ）「彼女の声をもっとよく聞きたくて、更に力一杯ペダルを踏んだ」には、「小父さん」のどのような気持ちが表れているか。「小父さん」の心情の変化に着目して七十五字以内で説明せよ。

（次ページより解答欄）

問㈠

(1)

(2)

(3)

問㈡

問㈢

問㈣

問㈤

第四講

40分

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「他者」をめぐる以下の考察は、徹頭徹尾デカルト的観点からなされる。しかし、デカルト的観点とは何か。ここであらかじめ、一つの誤解を正しておきたい。それは、方法的懐疑の結果デカルトが発見した「私」の存在を「近代的自我」なるものの発見に重ね合わせてしまう見解である。これはまったく間違っている。そのようなことを語る「哲学者」がいたとすれば、彼の「哲学」はいっさい信用できない、と言えるほどである。そして、もしかりにこの文脈で「近代」ということについて語ることに意味があるとすれば、デカルト的な「私」は、明らかに近代を「超える」ものであるといわなければならない。なぜならば、近代的であるとは、いっさいの唯一性を否定し、すべてを同等なるものの複数性において語ろうとする志向をもつことであるのに対して、ここでデカルト的であるとは、本質的に隣人（同等なるもの）をもちえない唯一なるものとしてのこの私の存在にどこまでも固執することを意味するからである。近代とは、ひとことで言え

ば、A等質空間の捏造（ねつぞう）の時代であり、デカルト的であることは、まさにその等質性こそを疑うことなのである。

　自分と他人は違う。自分のことはよくわかるが、他人のことはよくわからない。いま自分が何を考え、何を感じているか、それは手に取るようによくわかる。しかし、いま他人が何を考え、何を感じているか、これは手に取るようにはわからない。この自他の非対称性は、誰もが知っている事実である。

　通常「他者の問題」といわれているものにはいくつかの種類があるが、そのどれを取っても、もとにあるのはこの事実であってそれ以外ではありえない。しかし、この事実をどのようにとらえるか、そのどこに「問題」を発見するかによって、「他者の問題」は多様な相貌をみせるのである。それはまた、他者の他者性をどこに見いだすか、ということでもある。

　まず、他人が何を考えているかわからない、という点を取り上げてみよう。今、路上でたまたま見かけた友人が、何かを必死で考えている様子である。何を考えているのか、微に入り細をうがって彼を外から観察して見ても、言い当てることはまず絶対に不可能であろう。彼は道に迷って微（かす）かな記憶の痕跡を必死に辿（たど）っているのかもしれないし、何らかの必要から三桁のかけ算を頭の中で必死になってやっているのかも知れない。彼が何を

考えているのか、どうすればわかるだろうか。彼に聞いてみればいい。だが、聞いてみるしかない。彼の答えが「暗算をしていた」であれば、疑問は氷解するだろう。なお残るわからなさは、なぜ彼は暗算などをしていたのか、という点だけであろう。そこで「なぜそんなことをしているんだい？」と聞いてみる。もし彼の答えが「路上で暗算をすると心が晴れる」だったとすれば、[B]今度のわからなさは最初のそれとは異質である。そして、そのわからなさがどこまで問答を続けても晴れないとき、そこに「他者の問題」がある仕方で登場してくることになる。このような場合に問題となる他者の他者性を、かりに「理由の他者性」と呼ぶことにしよう。

　理由の他者性について論じるべきことがらは多い。それは結局のところ人間の行為全般におよぶからである。およそ人間が自らおこなう行為のすべては、行為というものの本質上、その人の考えることによって導かれており、人の考えることは、考えるということの本質上、理由の連鎖によって成り立っているからである。ところが、ある人にとってもっともな理由は他の人にとっては納得のいかない理由である。納得のいかない理由によってなされた行為は不可解な行為であり、しばしばそのような行為をおこなう人物は不可解な（訳のわからない）人物である。要するに、ここで問題になっているのは人間の従う規範なのであって、異なる規範に従う者

が、すなわち他者なのである。Cしたがって、すべての人間があらゆる点で同一の規範に従うとすれば、この意味での他者は存在しないことになる。

次に、他人が何を感じているかわからない、という点について考えてみよう。今、路上で見知らぬ老女がつまずいて倒れ、膝がしらを擦りむいて痛そうにしている、とする。彼女が何を感じているのかは、一見して明らかであろう。もちろん、痛みを感じているのである。ひょっとしたらかゆみを感じているのかもしれないと思って彼女に質問してみる、というのは常軌を逸している。しかし、他人の感じていることはわからないのだから、彼女がそのとき膝がしらに痛み以外の感覚をもった可能性が皆無であるとは断言できない。そこで彼女に聞いてみる。彼女が「痛い」と答えたならば、この上はもはやいかなる疑問も残らないだろう。彼女はやはり痛みを感じていたのである。

ここで重要なことは、なぜ彼女は痛みを感じていたのか、という疑問は残りえない、という点である。それは、目の前で彼女がころぶところを見ていたからなのではない。たとえ彼女の膝がしらの痛みがなんの脈絡もなしに突然現れたものであったとしても、したがってその痛みがなぜ起こったのか外から眺めていただけでは決してわからなかったとしても、なぜその痛みが起こったのか決定できるのは、彼女を外から観察する医者であっ

て、彼女自身ではない。痛みは、彼女に起こる出来事であって、彼女がおこなう行為ではないからである。起こる出来事にとって、問題なのは原因であって理由ではない。[D]それゆえ、「理由の他者性」はここでは問題になりえないのである。

それならば、ここで問題となりうるのはいかなる他者性であろうか。それは彼女が感じているものそのものの他者性である。これを「感覚の他者性」と呼ぶことにしよう。感覚の他者性という「問題」は、理由の他者性という問題にくらべて遥かに技巧的な「問題」であるといえる。それはおそらく哲学者によって作られた問題なのであって、普通の人が日常生活の中でふとそのような問題を感じる、ということはまず考えられない。問題を作り出した哲学者は、大略次のようなことを主張する。われわれは誰も他人の感覚を感じることができない。他人の痛みを痛んだことのある人は誰もいないのだから、他人の痛みがいかなるものであるのか、誰も知ってはいない。「痛み」とはそもそも「私の痛み」を意味する言葉なのであって、「他人の痛み」が何を意味しているのかは、誰にもわからないのである。それにもかかわらず、通常われわれはその種の言葉を問題なく使っている。それはどうしてなのか。

つまり、ここでは問題のなさが問題なのである。本来問題を感じて然る

べきところで誰も問題を感じていない、ということが問題だというわけである。一見したところでは、この「感覚の他者性」という問題は、思考や意図や期待を含めたすべての心理現象について妥当する問題であるかのように見える。誰も他人の思考や意図や期待を体験したことはないからである。しかし、[E]<u>そうではない。</u>思考や意図や期待には、理由の他者性はあっても感覚の他者性はないのだ。なぜならば、ある人が感覚しているとき体験していることは感覚の本質をなすのに対し、思考（意図・期待）しているときに体験していること（感じていること）は、思考（意図・期待）の本質とは無関係だからである。68＋57を考えているとき、その人がどのような心的体験を持っていようとも、それはこの計算の本質とは関係がない。そこにもし他者性があるとすれば、それは、この計算をいかなる規範に従っておこなっているかという「規範の他者性」に関するものであって、これは意図や期待に関しては「理由の他者性」として現れる種類の他者性なのである。

　感覚の他者性をめぐる話題のうちで最も興味深いのは「ロボットの疑惑」に関するものである。誰も他人に起こる心的現象を経験したことはないのだから、他人と人間そっくりに出来たロボットの間には区別が成り立たないことになる。[F]<u>感覚の他者性を前提する限り、他人の痛みとはすなわち</u>

他人の痛みの振る舞いのことでしかありえず、そうである以上、定義上その他人と同じように振る舞うロボットは、他人と同じ意味で「痛みを感じている」ことになる。逆にもし、ロボットが痛みを感じるはずはない、というのであれば、他人もまた痛みを感じるはずはない、というわけである。ということはつまり、(人間であると信じていた)古くからの友人の一人が、精巧に出来たロボットであることがわかったとしても、あるいは精巧に出来たロボットになったとしても、そこには何の違いも認められない、ということである。これは奇妙なことではないだろうか。

(永井均『〈私〉の存在の比類なさ』による。ただし、問題の作成の上から、本文の一部を改めた。)

(注) デカルト……フランスの哲学者(一五九六〜一六五〇年)

問１　傍線部Ａ「等質空間の捏造」を分かりやすく説明せよ。

問２　傍線部Ｂ「今度のわからなさは最初のそれとは異質である」とあるが、両者のわからなさはどういう意味で異質なのか、説明せよ。

問３　傍線部Ｃ「したがって、すべての人間があらゆる点で同一の規範に従うとすれば、この意味での他者は存在しないことになる」とあるが、なぜ、そう言えるのか、説明せよ。

問４　傍線部Ｄ「それゆえ、「理由の他者性」はここでは問題になりえない」とあるが、なぜ、そう言えるのか。「理由の他者性」の意味に基づいて説明せよ。

問５　傍線部Ｅ「そうではない」とあるが、具体的にはどういうことか。本文中の語句を使って説明せよ。

問６　傍線部Ｆ「感覚の他者性を前提する限り、他人の痛みとはすなわち他人の痛みの振る舞いのことでしかありえず」とあるが、なぜ、そう言えるのか、分かりやすく説明せよ。

問1

問2

問3

問4

問6

問5

解答解説

第一講　解答

問一

1	推奨
2	端的
3	往々
4	忌避
5	啓発
6	荒唐
7	露骨

問二

現代文明では、不殺生を文化の基本的な原則とすると同時に、食用の動植物の殺戮が行われているという矛盾。

問三

どこまでなら「食べてよい」のか、または「食べてはいけない」のかという問いの答えは、各々の文化によって異なるということ。

問四

伝統的な食物を食べている文化と、それを批判する文化との間で、「食べてよいもの」と「よくないもの」の対立が生じている場面。

問五

理解しがたい自然の事象に対し、自然と人間の世界とを調停する手段である神話と同様に、料理も発酵というある期間自然のなかに放置することによって腐敗させ人間にとっての旨みを引き出すものを利用するから。

第二講　解答

〔問一〕

1	2	3	4	5
淡	概	旋律	破壊	損傷

〔問二〕

「写し」の比喩は、過去の記憶の、元の風景と同様に目で見えるものとしての細部を持っているという性質を指しているが、実際の過去の記憶は風景とは異なり細部を見つめることはできず、忠実に写生することはできないから。

〔問三〕

知覚することは今目の前にあるものを感覚によって捉えることであるのに対して、思い出すことは対象が現在的な感覚を介さずじかにたちあらわれることである。

〔問四〕

「なんともわからぬ痕跡ではなく、ある対象の痕跡とわかって思い出しているとすれば、思い出している当の対象のことを既に承知していることになるので、思い出すための痕跡は不必要であるから。

〔問五〕

かろうじて脳に残存する、過ぎ去った対象の痕跡を思い出すのではなく、思い出の中に今存在するその対象自身を思い出すという意味。

第三講 解答

問㈠
(1) 小さく程よく整っている様。
(2) 相手の勢いに押されてひるむこと。
(3) 親しみを感じられなかった。

問㈡
誰の目にも触れられなかった鳥のページが、やっと開いてもらえたかと安堵する様子。

問㈢
小鳥の本ばかり借りることを、今まで意識したこともなかった司書から突然指摘されたから。

問㈣
「小父さん」が借りるのは必ず鳥に関連する本であるという法則。

問㈤
兄の死後、他者との交流がない生活を送っていたが、鳥を救った兄の死を前向きに受け止めることができ、司書との交流を楽しみにする気持ちになっている。

第四講　解答

問1

自己とは本質的に同等なるものを持ち得ない唯一の存在であるのに、近代は一切の唯一性を否定し、すべてを同等なるものの複数性において語ろうとするということ。

問2

「何を考えているのかわからない」という時のわからなさは質問をしてみることによってわかるのに対し、「なぜ考えているのかわからない」という時のわからなさは他者の固有の規範に基づいているため質問をしてもわからないという意味で異質である。

問3

他者とは異なる規範に従う者のことであるが、すべての人間があらゆる点で同一の規範に従うとすれば、他者が存在することの要件が否定されることになるから。

問4

「理由の他者性」とは他者の行為についてその理由が異なる規範に従っているためわからないというものであるが、今問題になっているのは他者の行為ではなく出来事の原因であるから。

問5

「感覚の他者性」はすべての心理現象について妥当する問題のように思えるが、そうではなく、感覚しているときに体験していることは感覚の本質をなすのに対し、思考や意図や期待をしているときに体験していることは、思考や意図や期待の本質とは無関係であるということ。

問6

「感覚の他者性」とは他人の痛みなどの感覚を感じることは体験できないため誰もわからず、自分が痛みを感覚しているときと同様の振る舞いを他人がしているということでしか他人の痛みを認識できないから。

Ⓒ RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。